

フリーターと選択と学校生活

——「高校生の生活と進路意識調査」から（一）——

菅野 正之

要約

本稿は、大阪府の公立高校三年生を対象とした質問紙調査のデータから、高校卒業時における「進学」「就職」「フリーター」への進路分化を、高校生の生活構造との関係から検討する。とりわけ「フリーター」という進路を「選択」する高校生に着目し、彼／彼女たちの学校生活と学校以外の場面における生活を明らかにする作業を通して、その「選択」の過程と構造を検討する。

はじめに

本稿は、「高校生の生活と進路意識調査」（高校生調査）データから、高校卒業時における「進学」「就職」「フリーター」への進路分化を多角的に検討するシリーズのうち、高校生の学校生活との関係から検討することを目的とする。

近年、高校生の進路分化に関しては、いわゆる「新卒

無業」状態で高校を卒業していく若者に注目が集まっている。『学校基本調査』で高校生の進路分化をみると、今回調査対象とした二〇〇四年度卒業者のうち、全国では八・五％が「進学」も「就職」もしていない「新卒無業」者だと捉えられる。さらに、大阪府では一・七％と全国値を上回り、都道府県別では沖縄県（二四・五％）、東京都（二二・三％）につぐ高率となっている。ただし、「新卒無業」といっても、正規雇用としての「就職」をしていないだけで、実際にはアルバイトをしている、つ

まり「フリーター」になっている者が多数含まれることは想像に難くない。今回行った調査においても、「今の時点で、高校卒業後あなたはどのような進路に進む予定ですか」との問いに対し、「フリーター（進学でも就職でもなく主にアルバイトをする）」を選択した高校生が一七三人（二二・三％）いた。²⁾

さて、私たちの研究グループは、このシリーズで扱う「高校生調査」に先行して、大阪に住む「フリーター」の若者を対象とした生活史調査（「大阪フリーター調査」）を行っている。³⁾ 本稿の目的に合致する知見を選んで紹介するならば、複雑な生育環境のもと、義務教育段階から学校での学習についていくことができず、他方で仲間たちとさまざまな「遊び」世界に没入することで、早期に学校世界から離脱していく姿がいくつも語られた。西田（二〇〇五）は、このような「遊び」世界への誘因を「他にすることがない」という隙間を埋める十分な『楽しさ』を備えているが故に、家庭や学校から離れていく者の心を捉え、逆に、勉強や仕事、安定した家庭生活の実現を阻害するワナとして機能している」と解釈している。

「高校生調査」全体が、「大阪フリーター調査」の知見を量的に検証することを目的に設計され、実施されている。本稿はその一部として、先の知見を検証するためにも、

高校卒業後に「フリーター」という進路を「選択」する高校生の生活構造を量的に捉えることを課題とする。

一 調査の概要

このシリーズで用いるデータは、大阪府の公立高校一校の協力を得て、各学校の三年生を対象として実施した「高校生の生活と進路意識調査」から得られたものである。調査は、二〇〇四年二月から〇五年一月にかけて、ホームルームあるいは選択授業の時間などを利用して、質問紙を用いた集合自記式にて実施した。最終的な有効回答票は一四〇九票であった。また、〇五年一〇月には、本調査で得られなかった学区内トップクラスの二校を対象に追加調査を行った（一五二票。ただし本調査とは実施時期が異なるため、追加調査で得たデータは学校タイプ別集計で「進学校」参考データとして示す）。なお、この調査に関してより詳しい情報は、調査報告書（部落解放・人権研究所・二〇〇六）を参照されたい。

さて、「高校間格差」構造という言葉があるように、協力を得た二校の状況は一樣ではない。そこで、受験偏差値や生徒の予定進路などをとに四つの「高校タイプ」に分け、以降の分析で用いていく。以下、生徒の予

表1 学校タイプ別進路分化 (%)

		進学	就職	フリーター	(N)
準進学校	男性	97.8	1.5	0.7	(134)
	女性	97.8	0.7	1.5	(135)
中間校	男性	87.7	7.4	4.9	(81)
	女性	77.9	14.3	7.8	(154)
商業校	男性	60.0	31.4	8.6	(35)
	女性	43.5	41.6	14.9	(356)
進路多様校	男性	60.7	31.0	8.3	(168)
	女性	42.7	27.7	29.6	(253)

表2 学校タイプ別「進学」予定者の進学希望先 (%)

		大学	短大	専門学校	(N)
準進学校	男性	89.9	0.8	9.3	(129)
	女性	58.5	16.2	25.4	(130)
中間校	男性	55.1	2.9	42.0	(69)
	女性	16.1	22.0	61.9	(118)
商業校	男性	19.0	4.8	76.2	(21)
	女性	19.4	20.0	60.6	(155)
進路多様校	男性	43.9	3.1	53.1	(98)
	女性	18.7	20.6	60.7	(107)

表3 学校タイプ別「授業内容理解」 (%)

	小学校	中学校
準進学校	86.5	90.0
中間校	73.1	53.7
商業校	66.2	44.3
進路多様校	60.0	27.4
(進学校)	90.1	97.4

注) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の割合

区内の公立普通科トップ群」の次に位置づけられる。九割の生徒が中学校時代の授業内容がわかっていたと答え、高卒後の進路はほぼ全員が「進学」を予定している。「進学」予定の生徒のうち、男性では九割、女性では六割が「大学」への進学を予定している。

2 中間校

受験偏差値は四〇台なかばで、「学区内の真ん中からやや下」に位置づけられる。中学校時代の授業内容がわかっていたとする者は五割にとどまる。高卒後の進路は、大部分が「進学」を予定している状況は準進学校と似ているが、そのうち男性の四割、女性の六割が「専門学校」への進学を予定している点が準進学校と異なる。

3 商業校

受験偏差値は四〇台。名前のとおりいわゆる「商業高校」で、女性が九割を占めている。女性のみを取り出すと、「就職」予定が四一・六%と四つの学校タイプの中で最も高いが、「フリーター」予定者も一四・九%いる。

定進路(表1、表2)や小学校・中学校時代の授業理解の様子(表3)などから、各タイプのプロフィールを示しておく。なお、ここでの予定進路とは、高校三年生の十二月～一月時点における「予定」である。「進学」志望者のなかには、すでに推薦などで進学先が決定している者とこれから受験を予定している者が含まれ、「就職」志望者のなかには、この時点でまだ就職先が決定していない者が約三割含まれている。

1 準進学校

受験情報誌による受験偏差値は五〇台なかばで、「学

4 進路多様校

受験偏差値は三〇台で、「学区内の下位」に位置づけられる。中学校時代の授業内容がわかっていた者は三割に満たず、小学校時代でも六割にとどまることから、学習面において「困難」を抱える者が多いといえる。進路予定では、女性の二九・六％が「フリーター」を進路としていている点が特徴的である。

二 フリーター「選択」理由

なぜ、「フリーター」を「選択」するのか。これは本シリーズ全体に共通する根本的な課題であるが、スタートに「フリーター」予定の高校生にたずねた結果(表4)をみると、約半数が「進学する費用が高いから」という理由をあげている。また「就職」希望者でも約四割が同じ理由をあげ、「やりたい仕事があるから」をあげた生徒は少数にとどまる(表5)。

「就職」予定者も「フリーター」予定者ともに、高校を卒業した後に進学はせず、その形態は異なれども労働市場への参入を「選択」した層である。ただし、その「選択」は、必ずしも積極的になされたものばかりでは

なく、経済的理由により「進学できない」という状況に置かれての「選択」である者も多い、といえるだろう。生育家族の状況と進路分化との関係についての詳細は、シリーズ三回目に予定されている妻木論文を参照されたいが、生徒の進路「選択」の背景には経済的な要因が強く作用していることは、ここでも強調しておきたい。

三 フリーターを「選択」する生徒の高校生活

高校生の生活は、学校のみで展開されているわけではない。そこで、さまざまな場面におけるさまざまな生活のうち「熱心に取り組んだこと」をたずねる項目を用意した。表6は、この結果を予定進路別に示した表である。ここから、次の二点を指摘できる。

- (1)「勉強」「学校でのクラブ活動」「学校行事」といった、学校における生活に「熱心にとりくんだ」とする者の割合は、「進学」予定者で高く、「フリーター」予定者で低くなっている。とりわけ「学校でのクラブ活動」は、「進学」四六・八％√「就職」二七・三％√「フリーター」七・六％と、その差が顕著にみられる。

(2)「アルバイト」に「熱心にとりくんだ」生徒の割

表4 「フリーター」を選択する理由 (MA)

	人	%
進学したくないから	30	17.3
自分の成績では進学できないから	33	19.1
進学する費用が高いから	92	53.2
いい就職先がないから	57	23.9
とりあえず収入がほしいから	64	37.0
ほかにやりたいことがあるから	46	26.6
フリーターのほうが正社員よりもいいから	9	5.2
学校を通した就職はうっとおしいから	34	19.7
好きな仕事ならフリーターでかまわないから	44	25.4
就職がうまくいかなかったから	16	9.2
どんな仕事か自分に向いているのかわからないから	65	37.6
就職はむずかしそうだから	14	8.1
その他	25	14.5
合計	173	

表5 就職を志望する理由 (MA)

	人	%
自分のやりたい仕事があるから	71	21.8
収入がほしいから	227	69.8
進学して勉強したくないから	117	36.0
条件のいい就職先があるから	52	16.0
自分の成績では進学できないから	24	7.4
高校の先生にすすめられたから	20	6.2
家族にすすめられたから	76	23.4
進学する費用が高いから	128	39.4
親元をはなれて自立したいから	63	19.4
その他	34	10.5
合計	325	

合は、「フリーター」六四・五%、「就職」五二・五%、「進学」三四・三%と、「フリーター」で高い。「彼氏／彼女とのつきあい」でも、同様の傾向がみられることから、「フリーター」予定者は、学校以外の場面における生活に「熱心にとりくんだ」者が多いといえる。

高校生活を予定進路との関係からみると、「進学」予定者は学校における生活を重視し、「フリーター」予定者は学校外での生活に重心を置いている。そして「就職」

予定者は学校生活も学校以外の場面における生活も、という中間点に位置づけられるだろう。

ただし、このような高校生活における重心の差は、学校タイプによってもみられる(表7)。

「学校でのクラブ活動に「熱心に取り組んだ」割合は、「準進学校」で高く、「進路多様校」で低い。また「学校行事」に「熱心に取り組んだ」割合は、「進路多様校」(二六・九%)の割合が他の学校タイプと比較して低くなっている。「準進学校」では学校での生活に重心を置く生徒が多く、「進路多様校」では学校での生活に重心を置く生徒が少ないなど、在籍する学校タイプにより、高校生活の構成要素やその重心が大きく異なる。

では、このような差異は、予定進路によって説明されるのか、それとも学校タイプによる学校文化・生徒文化の特徴として説明できるのか。「準進学校」ではほぼ全員が「進学」予定者なのに対し、「商業校」や「進路多様校」には「フリーター」予定者が多く含まれているように、予定進路と学校タイプは強く関連しあっている。この関連を解きほぐすためには、学校タイプを統制したうえで、予定進路と高校生活

表6 進路分化別「高校生活全体を通して熱心に取り組んだこと」(MA)(%)

	進学	就職	フリーター	合計
勉強	25.8	13.7	2.3	20.0
学校でのクラブ活動	46.8	27.3	7.6	37.3
学校行事	47.2	40.1	33.1	43.7
仲間との遊び	63.8	73.9	80.8	68.4
学校外での趣味やスポーツ活動	22.4	18.0	15.1	20.4
彼氏/彼女とのつきあい	19.4	31.4	38.4	24.6
アルバイト	34.3	52.5	64.5	42.4
ボランティア活動	4.6	1.2	1.5	3.4
その他	1.5	2.8	4.1	2.1
とくにない	5.7	3.7	3.5	5.0
(N)	(871)	(293)	(172)	(1365)

表7 学校タイプ別「高校生活全体を通して熱心に取り組んだこと」(MA)(%)

	準進学校	中間校	商業校	進路多様校	合計	(進学校)
勉強	30.4	19.9	19.6	12.7	19.5	46.7
学校でのクラブ活動	73.6	36.2	32.4	18.5	36.7	78.9
学校行事	50.7	50.8	51.4	26.9	43.1	52.0
仲間との遊び	59.3	74.0	66.4	71.6	68.0	53.9
学校外での趣味やスポーツ活動	23.6	24.8	18.4	18.3	20.5	22.4
彼氏/彼女とのつきあい	11.4	29.3	25.4	29.7	24.7	16.4
アルバイト	14.3	47.6	51.4	48.7	42.5	2.0
ボランティア活動	3.2	7.3	0.5	4.1	3.4	0.7
その他	1.1	1.6	2.9	2.8	2.3	2.6
とくにない	5.4	4.5	3.4	7.1	5.2	5.3
(N)	(262)	(246)	(414)	(464)	(1404)	(152)

との関連を詳細に検討する必要があるが、「熱心に取り組んだこと」は複数回答形式によるデータであるため、これ以上の分析は難しい。そこで、学校内・学校外のいくつかの生活について、異なる調査項目を用いて、さらに検討を加えていく。

四 学校における生活

学校における生活では、「授業内容はよくわかっている」と「病気などのとき以外は、遅刻や欠席はしない」の二項目をとりあげる(表8)。

「授業内容はよくわかっている」では、「商業校」や「進路多様校」において授業内容の理解が「しんどい」生徒が多い(準進学校「六二・四%」/中間校「五〇・二%」/商業校「四三・一%」/「進路多様校」三七・〇%)。そのうえで、「商業校」のみを取り出して予定進路別にみると、「進学」四七・二%・「就職」四八・二%・「フリーター」一五・八%と、「進学」「就職」予定者と比較して、「フリーター」予定者では授業内容を理解している割合が著しく低い。同様の傾向は、「進路多様校」のみを取り出してみられる。

「遅刻欠席はしない」では、「準進学校」六八・九%・

「商業校」五九・二%、「中間校」五〇・六%、「進路多様校」四〇・三%と、「授業内容」とは異なる順番になっているが、学校タイプによる差がみられる。そのうえで、「商業校」のみを取り出して予定進路別にみると、「進学」六四・〇%・「就職」六二・二%、「フリーター」三三・三%と、「フリーター」予定者に遅刻欠席がちの生徒が多いことがわかる。また、同様の傾向が「進路多様校」のみを取り出しても確認できる。

ここから、「フリーター」予定者の学校生活は、多くの「フリーター」予定者がいる「商業校」や「進路多様校」のなかでも、とりわけ授業の理解が「しんどく」遅刻欠席が多い傾向にある、いかえれば学校での活動とのつながりが希薄であることが明らかとなった。

では、「進学」「就職」予定者と「フリーター」予定者では、なぜこのような大きな差がみられるのだろうか。キーワードの一つは「推薦」であると考える。「高卒就職」は、これまでも「学校に委ねられた職業選抜」（荻谷・一九九二）や「学校経由の就職」（本田・二〇〇五）と指摘されてきたように、学校推薦を獲得することが就職への第一歩となる。⁵⁾ また、「進学」についても、推薦による進学が増大し、とりわけ近年進学率の上昇がみられる専門学科（いわゆる職業学科）においては、ほとんどの

生徒が推薦枠を利用して進学しているという先行研究もある（荒川・二〇〇〇）。今回のデータでも、「進学」予定者のうち、「商業校」では七三・五%、「進路多様校」では七二・九%が、調査時点の一二月時点で既に「進学先が決定」しているが、その多くが推薦による進学と考えてよいだろう。つまり、

今回の調査でターゲットとした高校生は、「進学」にせよ「就職」にせよ、学校推薦の獲得が進路実現の必要条件になっている。

推薦を獲得するためには、評定基準を満たすため一定程度授業を理解し、テストなどで成果をあげる必要がある。また、遅刻欠席をしないなど、高校生としての「基本的生活習慣」も重要な要素となるだろう。しかし、「フリーター」予定者の学校生活の特徴は、これらの要素と

表8 学校における生活(%)

	授業内容理解	遅刻欠席しない	(N)
準進学校	62.4	68.9	(279)
中間校	50.2	50.6	(239)
商業校	43.1	59.0	(401)
	「進学」	47.2	64.0
	「就職」	48.2	62.2
	「フリーター」	15.8	33.3
進路多様校	37.0	40.3	(444)
	「進学」	43.4	49.3
	「就職」	35.7	40.9
	「フリーター」	23.7	18.8
(進学校)	63.2	84.2	(152)

注) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の割合

は逆を向いているため、推薦の獲得が難しくなる。それゆえ「進学」や「就職」という進路は事実上断たれ、残る「フリーター」という進路へ水路づけられるのである。

五 学校外での生活

学校以外における生活では、アルバイト経験についての項目と、「保護者に無断で外泊する」「夜中に出歩く」という「夜遊び」に関する項目をとりあげる(表9)。

アルバイト経験について、「高校に入学してから現在まで、アルバイトをしたことがありますか」という項目のデータを学校タイプ別にみると、「準進学校」以外では、八割以上の生徒がアルバイトを経験している。また、「進路多様校」のみを取り出して予定進路別にみると、「進学」七六・九%、「就職」八二・四%、「フリーター」九六・九%と、「フリーター」予定者のアルバイト経験率が極めて高い。

また、アルバイト経験者を対象に、①「高校に入学してからアルバイトをしていた期間」、②「アルバイトをしているときに、平均して一ヶ月にどのぐらいのお金をもらっていたか」をたずねている。①×②により、高校生活におけるアルバイト「総所得」が把握されるが、こ

れを予定進路別にみると「進学」七八万円、「就職」一〇九万円、「フリーター」一一八万円となる。同じアルバイト経験者のなかでも、「就職」予定者や「フリーター」予定者において、アルバイト生活への包摂度がより高いといえよう。

「無断外泊」する生徒の割合は、「商業校」のみを取り出すと「進学」一〇・五%、「就職」一一・五%、「フリーター」四〇・三%、「進路多様校」のみ取り出すと「進学」一五・八%、「就職」二七・六%、「フリーター」三九・六%と、いずれも「フリーター」予定者の割合が高い。また、「夜中に出歩く」割合も同様に、「商業校」「進路多様校」いずれにおいても、「進学」「就職」予定者と比較して、「フリーター」予定者に多い。この二つのような「夜遊び」生活の比重が高まると、「朝に登校し、授業を受け(部活動を行い)、夕方に下校し家庭に戻る」という、「高校生」としての学校生活の維持が難しくなることは容易に想像される。

「アルバイト」は、少なくとも賃金を得るという意味においては「充実」した活動だろう。また、「夜遊び」が「楽しい」のは、筆者はもちろん、読者の多くが肯定するところだろう。そのような「充実」や「楽しさ」によって学校以外の場面における生活に引き寄せられ、学

表9 学校外での生活 (%)

	バイト経験	無断外泊	夜中出歩く	(N)	
準進学校	42.2	8.9	33.2	(280)	
中間校	81.7	18.3	44.0	(241)	
商業校	合計	86.3	15.2	37.0	(403)
	「進学」	82.9	10.5	32.0	(181)
	「就職」	86.6	11.5	33.9	(165)
	「フリーター」	96.5	40.3	61.5	(57)
進路多様校	合計	82.8	24.3	49.3	(444)
	「進学」	76.9	15.8	42.5	(221)
	「就職」	82.4	27.6	48.8	(127)
	「フリーター」	96.9	39.6	65.7	(96)
(進学校)	9.2	3.3	25.0	(152)	

注) 数値は「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の割合アルバイト経験については、「経験がある」割合

者の生活に、とりわけあてはまるだろう。

六 学校との結びつき

ここまで、学校生活との関わりという視点で、高校生
の生活構造をみてきた。それでは、その高校生は「学校」

校生活との関わりは希薄となる。学校生活への関わりが弱ければ、例えば授業内容がわからなくなるなど、そこに「楽しさ」や「充実」を見いだすことはますます難しくなり、学校外での「楽しさ」「充実」にますます引き寄せられる。このような、まさに「ワナ」ともいえる循環が、今回対象となった「フリーター」予定

をどのように捉えているのだろうか。「学校の規則がきびしすぎると思う」と「信頼できる先生がいる」という二項目をとりあげ、検討する(表10)。

「学校の規則がきびしい」について学校タイプ別にみると、「準進学校」六二・九%・「商業校」七〇・五%√「中間校」三〇・八%・「進路多様校」三二・六%と、結果は二分された。「準進学校」や「商業校」の生徒は自校の規則を「きびしい」と感じ、とりわけ「商業校」の「フリーター」予定者では、ほとんどの者が「きびしい」と感じている。

この項目自体は、あくまで高校生が自校の生徒指導をどう感じているかという認識を示しているにすぎない。「フリーター」予定者がより「きびしい」と感じていることは、学校生活との関わりが弱いことと表裏一体であろう。しかし、学校タイプによりこれだけ認識に差がみられることは、実際に学校で行われている生徒指導がどのようなものであるのか、推察する材料になるだろう。つまり、「準進学校」や「商業校」では、実際の規則やそれに基づく生徒指導が徹底していることを示しているのではないか。表8で「遅刻欠席をしない」生徒の割合をみたが、「準進学校」と「商業校」でこの割合が高かったことも、この解釈を支持するデータだろう。

学」予定者や「就職」予定者は、教師と一定の信頼関係を取り結んでいる。つまり、規則は「きびしい」と感じつつも、学校生活との関わりは保ち続け、さらに教師との結びつきをもつなかで、学校推薦の獲得という進路選択プロセスが進行している。「商業校」の徹底した指導は、彼／彼女たちに対しては有効に機能しているのである。

他方、「商業校」の「フリーター」予定者は、学校生活との関わりが低く、教師との関係も希薄である。この指導が進路決定に対して有効に機能しているがゆえに、

表10 学校との結びつき (%)

	規則厳しい	信頼教師いる	(N)
準進学校	62.9	52.9	(280)
中間校	30.8	48.6	(240)
商業校	合計	70.5	(401)
	「進学」	66.8	(181)
	「就職」	68.1	(163)
	「フリーター」	89.4	(57)
進路多様校	合計	32.6	(444)
	「進学」	26.7	(221)
	「就職」	33.1	(127)
	「フリーター」	45.9	(96)
(進学校)	27.0	50.7	(152)

その「商業校」のなかで、「信頼できる先生がいる」割合を予定進路別にみると、「進学」「就職」予定者と比較して、「フリーター」予定者で教師との信頼関係を取り結べていない生徒が多い(「進学」四四・四%・「就職」四〇・九%√「フリーター」二一・〇%)。徹底した指導がなされている

その指導に(へのらない)こと、あるいは(おろる)ことは、残された「フリーター」という進路への水路づけを意味する。学校とのさまざまな側面での結びつきのありようが、進路決定に大きく影響しているのである。

おわりに

ここまで、フリーター「選択」層の「高校生活」の特徴として、「遊び」や「アルバイト」といった学校外での生活に重心があり、その生活へと包摂されることにより、学校生活へのコミットメントがますます希薄となる、という姿が描き出された。さらに、学校生活へのコミットメントの希薄さが、「進学」や「就職」に不可欠な「推薦」獲得を困難とし、「フリーター」という進路へと「方向付けられる」可能性を指摘してきた。

ここまで、表題も含め「フリーター」という用語を多用してきた。また、議論の背景には「フリーター」という進路は問題である」という認識が筆者にはある。この問題について、最後に指摘しておきたい。

「フリーター」とは、どのような働かせ方なのか。それは、賃金も、雇用継続性も、さらには職場の人間関係の面でも、人に「不安定」な状況を強いる働かせ方であ

る。また、「二」でみたように、「フリーター」選択の背景には、経済的要因が強く影響している。つまり、ここまでみてきた「商業校」や「進路多様校」から「フリーター」への移行」とは、「不安定」な状況から「不安定」な状況への移行」と言えるのである。

近年、社会的・経済的剥奪の状況に至るプロセスに着目したアプローチとして「社会的排除」概念が注目されている。本稿で示した「不安定」な状況から「不安定」な状況への移行は、まさに「社会的排除」プロセスの一端であり、そこには学校との結びつきの希薄さ、言い換えれば「学校からの排除」プロセスが関連している。

学校が子どもと関係を持ち続けること、これが「社会的排除」プロセスを断ち切る要素になりうる。ここまでの議論で示唆される。そのために必要なのは、個々の学校、個々の教師がより努力することではない。このような努力はすでになされ、それが限界に達していると思われるからである。子どもと関係を持ち続けられる学校や教師を支える教育のあり方や教育制度を構想することこそが、現在の日本社会に求められていることだろう。

注

(1) 卒業者総数のうち、「一時的な仕事に就いた者」+「左記以外の者」の比率。「左記以外の者」とは、「進学」も「就職」もしなかった者を指している。

(2) 同項目で「まったく決めていない」を選択した者は一人(一・一%)にとどまり、また「家事を手伝う」は選択者〇人だったことから、「就職」も「進学」もしない \parallel アルバイトをする(フリーターになる)ことが、高校生に浸透していることがうかがえる。

(3) 詳細は、部落解放・人権研究所編(二〇〇五)を参照。

(4) 調査の実施にあたり、「大阪府立学校人権教育研究会」ならびに「大阪市立高等学校人権教育研究会」に多大なる協力をいただいた。

(5) ただし、かつては学校推薦 \parallel 事実上の就職決定であったが、近年では学校推薦はあくまで就職の第一関門にすぎず、その後に行われる企業側の就職試験での選別が強化されている。

(6) アルバイト経験のある高校生に「アルバイトを始めた理由」をたずねているが、七〇・五%が「お金がほしいから」をあげている。また、「アルバイトで稼いだお金をどのように使っていましたか」という項目では、六四%が「ほしいものを買う」、六三・〇%が「あそび」を

あげている(複数回答)。このように、多くの高校生にとってアルバイトは「遊ぶ金」を獲得する手段だと考えられる一方、一三・八%が収入を「家計の助け」に使っていることも同時に指摘しておきたい。

(7) もちろん、調査対象校が限定されているので、「準進学校」だから、「商業校」だから、という結果の一般化には慎重にならなければならない。

(8) 近年出てきた「ワーキング・プア」の「貧しさ」について、伍賀(二〇〇五)の議論を参照した。あるいは、「不安定」な状況をリアルに描写し、正当な議論を展開した著作に兩宮(二〇〇七)がある。

(9) バラ、アジット・S/ラペール、フレデリック(福原/中村監訳・二〇〇五)を参照されたい。

(10) 「学校からの排除」概念と「社会的排除」との関係については、西田(二〇〇六)を参照されたい。

参考文献

兩宮処凛(二〇〇七)『生きさせろ!―難民化する若者たち』

太田出版。

荒川葉(二〇〇〇)「学習指導組織・進路指導組織」樋田他

編著『高校生文化と進路形成の変容』学事出版。

バラ、アジット・S/ラペール、フレデリック著(福原宏

幸/中村健吾監訳・二〇〇五)『グローバル化と社会的排除―貧困と社会問題への新しいアプローチ』昭和堂。

部落解放・人権研究所編(二〇〇五)『排除される若者たち―フリーターと不平等の再生産』解放出版社。

部落解放・人権研究所(二〇〇六)『フリーター選択の構造と過程―高校生の生活と進路意識調査』報告書。

伍賀一道(二〇〇五)『雇用と働き方から見たワーキング・プア』『ポリティック』第一〇号。

本田由紀(二〇〇五)『若者と仕事―「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。

荻谷剛彦(一九九一)『学校・職業・選抜の社会学―高卒就職の日本的メカニズム』東京大学出版会。

小杉礼子(二〇〇三)『フリーターという生き方』勁草書房
熊沢誠(二〇〇六)『若者が働くとき―「使い捨てられ」も「燃えつき」もせず』ミネルヴァ書房。

西田芳正(二〇〇五)『遊びと不平等の再生産―限定されたライフチャンスとトランジション』部落解放・人権研究所編前掲書。

西田芳正(二〇〇六)『フリーター調査から「子ども・若者と社会的排除」研究へ―若年未就労問題調査プロジェクトの展開』『部落解放研究』一七二号。